



第60話 学生のコミュニケーション能力及び語学力とプレゼンテーション

今回は学生が社会に巣立つ際、専門的知識の他に、身に着けてほしい能力についてお話しする。これを社会人力という。特にコミュニケーション能力と語学力及びプレゼンテーション能力が必要である。工学系の学生は（我が大学の学生だけかも）上記3つを特に苦手とする。経済産業省は、社会人基礎力を、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力と定義し、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に分類。その能力要素として「主体性、働きかけ力、実行力」、「課題発見力、計画力、想像力」、「発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力」を挙げる。文言としては分かるが、如何に訓練し、強化すべきか明確でない。

その他にも、「英語力、コミュニケーション能力、ディベート力、IT技術、プレゼンテーション能力、問題解決能力、共感力」などがある。これらは具体的で分かり易い。ただ全ての能力のスキルアップは望めない。在学中に目標を定め、一つでもスキルアップができれば良い。ここでは、建築学科の取り組みについて紹介しよう。

ゼミ生には、まずIT技術を身に着けさせる。これは工学系技術者であれば拒否反応は少ない。IT技術は使う技術、維持管理する技術、プログラムを作る技術に分類されるが、少なくともコンピュータリテラシーや専門分野のアプリケーションソフトを使いこなす能力が必要である。これらはカリキュラムやゼミで教育する。ネットやセキュリティに関する知識やコンピュータの維持管理、さらにはアプリケーションソフトを作る技術を習得すれば、会社や社会におけるステータスが向上する。

学生のコミュニケーション能力は年を追うごとに低下している。スマホの普及で集団での会話が減少し、特に世代間の正確なコミュニケーションは難しい。同世代では同じ価値観と趣味などで結び付き、言葉不足でも互いに推測し、意思の疎通に不都合はない。しかし、世代が異なり、しかも上下関係のある職場では共通の思考基盤がないため、通常の会話は成立せず、敬語さえも使えない。特に、報告や連絡、相談などは正確なコミュニケーションが必要となる。コミュニケーションの教育と訓練は難しい。大学では特に講義することはないが、部活や体育クラブなどで上級生との会話を推奨する。ゼミでは上級生は下級生を指導し、学習支援を行いながら、コミュニケーション能力の実践訓練を行う。輪講でも教員が入ることで、コミュニケーション能力が向上する。

工学系学生の語学力として、英語力を取り上げる以前に、日本語の書く力、文章力や表現力が稚拙であることの方が問題である。宿題やレポートでは、図やグラフばかりで内容の趣旨が伝わらない。誤字脱字が多く、日本語の基本が修得できていない学生が多い。レポートや卒業論文の書き方を通して、ゼミで個人指導により書く能力を教育・訓練する。文章表現能力は個人で異なるため、講義中心の集団訓練は難しい。レポートや論文は、正確に内容の趣旨が伝えられるかが本筋。まずは文章を書かせ、誤字・脱字、「てにをは」の吟味、修飾語の位置などの基本規則を教える。センテンスは単純に、ただ同じ語を続け、文章を稚拙にしない。類語辞典で語彙を学ぶ。などなど、文章作成の基本を学習。次に、レポートの書き方、卒論の書き方などをテキストで学ぶ。後は、練習あるのみ。教員が赤を入れるとか、学習者同士が互いに文章を校正するのも良い。文章の訓練は学生のうちにやるのが上策。年をとっても下手な人や苦手な人は、人生大きく損をする。

プレゼンは語学と同様、日ごろの努力でスキルアップが可能である。まず、プレゼンの基礎をテキストにより学ぶ。「言いたいこと、発表時間は如何ほど、聞き手の内容に対する知識程度」などを分析し、効果的なシナリオを作る。その際「自己完結型の図形、表を使用、簡潔な文、図が必要か否かを吟味」などを学習する。プレゼンに必要な能力は「準備のための段取り力、考えを組み立てる論理力及び具体化する力、図解力、発表における本番力」など多数あり、プレゼンのスキルアップで必然的にこれらの能力も磨かれる。大学では、建築学会大会での発表や卒論・修論でプレゼンの訓練を行い、スキルアップを目指す。

先輩から聞いたプレゼンに関するノウハウを二つ紹介しよう。準備は十分なのに、いざ壇上に上がると頭が真っ白、言葉はシドロモドロ。このような状況に陥る人は、聴衆者の一人に稽古を事前に見せ、本番はその人に向かってプレゼンを行う。席は前方の少し横、途中何度もうなずいてもらい、これを見て落ち着きを取り戻す。この方法を数度行えば、自然にプレゼンが実施できる。二つ目は、優秀な先生に知己を得たい場合である。講演会や発表会では必ず最後に質疑応答が行われる。前方に座り、真剣に聞くふりをし、途中でうなずくと良い。上記と反対で、発表者を気持ち良くさせる効果がある。質疑応答では、最初に手を挙げ、発表内容の本質で、しかも答え易い質問をする。最後に必ず「質問が多数あるので、後で伺っても良いか」と言う。講演後、発表者を捉まえ、会話を楽しめば、もう十年来の友人である。何れも極まともな方法ではあるが、やってみる価値はある。心当たりのある方は是非お試しあれ。